2‐5‐4　川原町（湊町・玉井町・元浜町）の由来

長良川の川湊（かわみなと）として繁栄した川原町は、古くは中河原（なかかわら）と呼ばれ、ここを貫いている表通りは中世からの古い道筋で、斎藤道三公、織田信長公の城下町の時代には市場も開かれていた。

近世から近代を通して、上流からの和紙や木材などを扱う大きな商家が軒を連ね、長良川流域の拠点として栄えた。落ち着いた佇まいを見せる町並に、切妻平入（きりづまひらい）り、窓に格子（こうし）を施し、壁を真壁造漆喰（しんかべづくりしっくい）仕上げにした伝統的な町家が並んでいる。

今、あなたが立っているこの広場一帯は、かつては長良川の遊水地となっていて、木材や鵜飼観覧船なども入り込んでいた。商家の裏側には玉石垣の上に黒壁土蔵が並んでおり、川とともに生きてきた営みを今に伝える。

ここから仰ぎ見る金華山は、今も昔も変わらぬ姿で聳（そび）えている。緑の山麓の合間に望む朱色の三重塔は、大正天皇の御即位を記念したものである。風光明媚（ふうこうめいび）な金華山において、町家の中から最も美しく見えるポイントとして指示したのは、川原町の商家に逗留（とうりゅう）していた日本画家の川合玉堂画伯である。

長良川と金華山に抱（いだ）かれた川原町は、古くからの伝統を受け継ぎ、未来に伝えるまちとしてここにある。

川原町町づくり会

説明板より